

建物の配置

玄関は道路から近ければ近いほどいい? **X**

採光計画

建物北側も工夫次第で光を採り入れられる? **O**

通風計画

24時間換気設備があれば通風はいらない? **X**

玄関

玄関を区画すると居室は過ごしやすくなる **O**

家族空間

広がりの中に落ち着きを感じる場所が欲しい **O**

個室

子供には壁でしっかりと仕切った個室が必須? **X**

階段

リビングの一角に階段を設けても大丈夫? **O**

実例で見る、良いプランと悪いプラン

間取りの

OとX

気持ちよく暮らせる住まいを実現するには間取りのどんな点に注意すればよいのでしょうか? 採光や風通しなど、暮らしを快適にする7つのテーマごとに

良い例と悪い例を挙げて解説します。

本企画で取り上げた○事例はすべて長谷川建築デザインオフィス設計 特記なき写真はインタラクティブコンセプトInc.撮影



解説: 長谷川順持さん
長谷川建築デザインオフィス代表/建築家。住空間の美的で生活的な観点と、目には見えにくい、温熱環境的な視点を両立したデザインに定評がある。著書に『環境共生住宅のつくり方』『快適間取りのつくり方』(共に彰国社刊)。連絡先は P177 に掲載

階段

上下を結ぶ階段
自由自在に
デザインしましょう

イタリヤのスペイン広場をこ存じですか? 映画「ローマの休日」でオードリ・ヘップバーンがアイスクリームを食べる有名なシーンの背景です。広場といってもその半分が階段で、現在でも街の人々が集い、語らいの場所として生き続けています。そう、それはまるでリビングのようです。住宅の階段もスペイン広場のようなであれば楽しい場所になりそうですね。
以下のポイントに留意すれば、それは可能です。

POINT

- 1 階段を廊下の隅に通路動線の一部として設定しないこと
- 2 必ず家族空間内に取り込んで、ゆとりをもって幅をとり、上と下を「結ぶ場所」としてとらえる
- 3 レベル差がある場所ゆえに、事によっては危険な場所にもなるので、幅のみならず、階段の高さや手すりなども工夫する
- 4 まずは「階段こそデザインする場所」くらいの心持ちで、階段を楽しくとらえよう

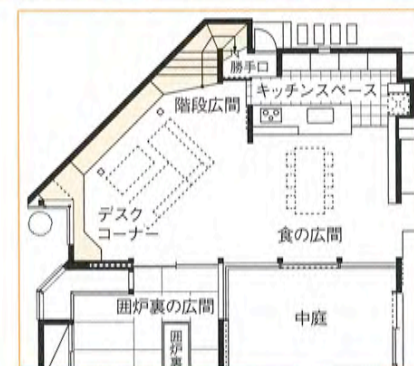
階段をリビングに



玄関を入るとすぐに階段のある家。非交流的な階段位置です。狭い玄関を広く見せる手法ともとれますが、この計画でも、階段をリビングに入れてデザインすれば楽しくなるはずですね。



この家では、変形した敷地でかつ、コンビニの駐車場に面する問題を解決するため、窓を開けずスカイライトによって光を取り込んでいます。リビングに結ばれた階段は、最終的に収納ベンチに姿を変え、リビング全体の流れをつくります。下はその間取り図です。(撮影=富田治)



階段は「結び」の場所



写真左/階段は、縦方向への移動の要。どこに移動するにも、リビングを感じられる階段計画です。
写真右/床の高さを半階ずつずらして配置するスキップフロアと階段は相性が良いといえます。それは「結び」の場所そのものです。(撮影=富田治)

建物の配置

敷地特有の条件を観察して
その土地ならではの計画を

日本人は「お日さま」が大好き。南側に道路が付いた敷地に人気があるのもその表れです。ところが、住まいづくりに関しては「間取り」への関心がもつぱら高く、建物の敷地への握り方、つまり「配置計画」を見落としがちです。まずは間取りを描き進める前に、配置計画の可能性をあらゆる視点で探ることが大切です。建築は敷地があつて初めて存在するもの。配置計画の良し悪しによって、土地に潜在する住まいづくりの可能性も広がったりしぼんだりします。

配置計画を間違わないためのポイントを以下に整理します。

POINT

- 1 周囲の建物の影をよく調査し、配置計画に生かす
- 2 道路と玄関の関係性を良好にし、玄関や勝手口とのつながりを考慮し、カーポートの位置を計画する
- 3 庭の活用をよく考えて、プライバシー確保と周囲への広がりが共存しうる配置や外構計画を
- 4 隣家の庭やカーポートなどのオーブンスペースにも着目する

玄関

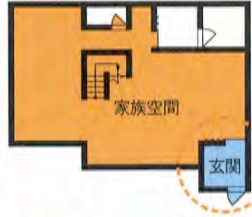
外と内を結ぶ場所として
丁寧に計画しましょう

日本の家は、靴を脱ぎ素足で室内を使いますから、なんらかの方法で上下足の切り替えゾーンが設けられます。すなわちここを「玄関」と呼んでいるのですが、玄関はそのように機能だけでは片付けられない歴史があります。個人差はありますが、来客を迎える機会がそれほど多くなかった現在、「格式」までの表現はいらないまでも、外と内を結ぶ場所として、新たな発想で、丁寧に扱いたい場所です。玄関を計画するうえでのポイントを以下に記します。

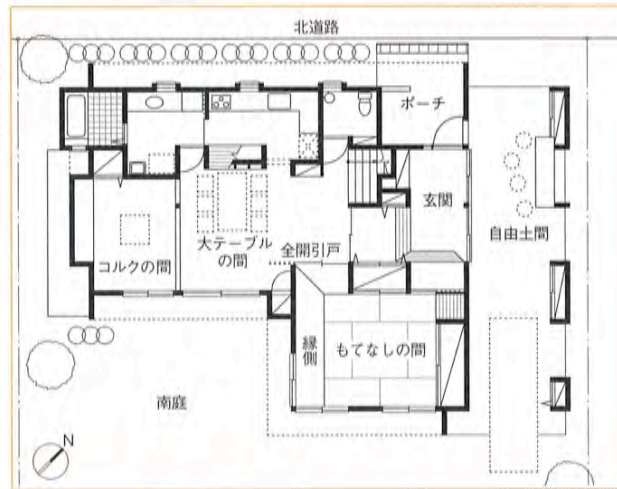
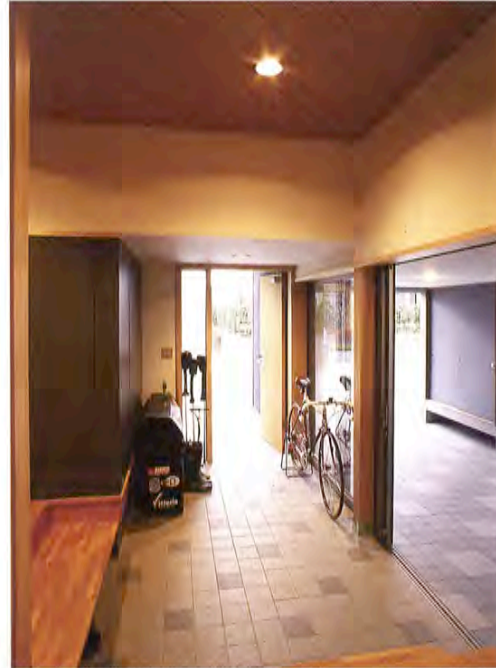
POINT

- 1 玄関は暑さ、寒さの影響を直接受ける「温熱環境」の厳しい場所。したがって、開口部の設け方には要注意
- 2 玄関は「社会／外から入ってくる人」と「個人／中で暮らす人」の接点。よって、「コミュニケーション」に影響を及ぼしうる空間として、家族空間との接続の仕方にも工夫したい
- 3 玄関には「土足」のゾーンと「上足」の場所とが混在する。それぞれの特性を生かした発想を

玄関は区画しよう

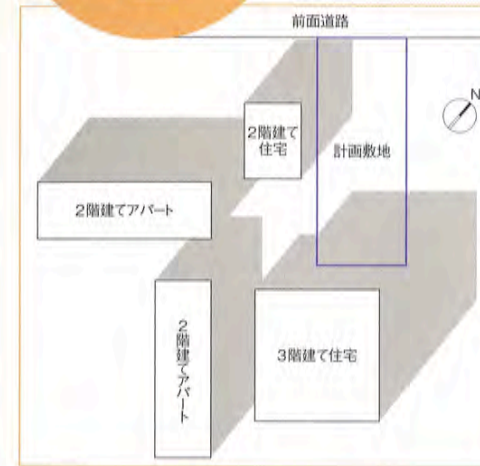


左図は模式図。玄関を部屋として区画し、それを家族空間の生活を分断しない位置に直接接続する考え方。区画することで暑さ、寒さを緩衝しながら、交流面であれば、「ただいま」と家に帰った人と家族とのふれあいが起こる間取りです。

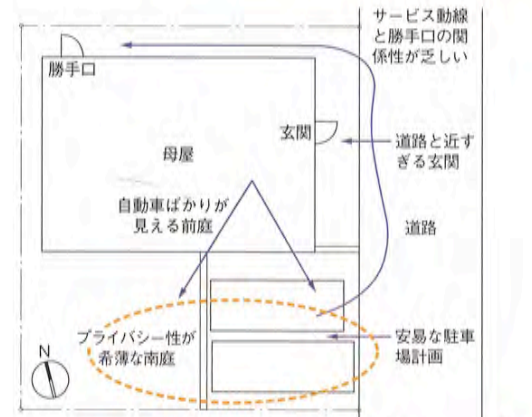


右図はその実例。写真は玄関の様子。廊下を用いず、区画も開放でき、玄関から直接客間にも入れる便利な計画です。

周囲の建物の影を知ろう



太陽を知るには影を知る。南側が建て込んだ環境でも観察すると、土地の可能性が見えてきます。左の図は敷地の周囲の建物の「冬場の影」を描いたもの。これにより配置計画への重要なヒントを見出しています。

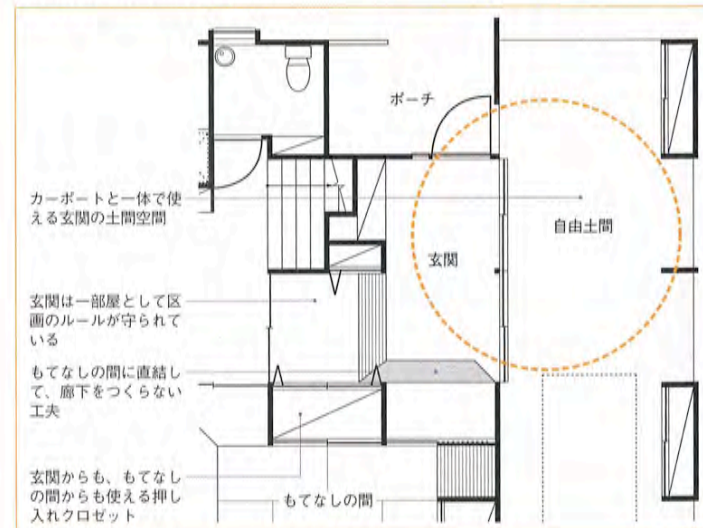


敷地に建物を据えて、その空きスペースに駐車場を置くのはいけません。玄関の落ち着き、サービス動線の確保など、配置計画は細やかに考えます。



玄関の可能性をもっと広げよう

玄関は区画というルールを守りながらも、カーポートと引き戸で結び、多目的利用を可能にしました。土足と上足の切り替わる場所、それぞれの特性をこんなふうに生かしてみたいかが。

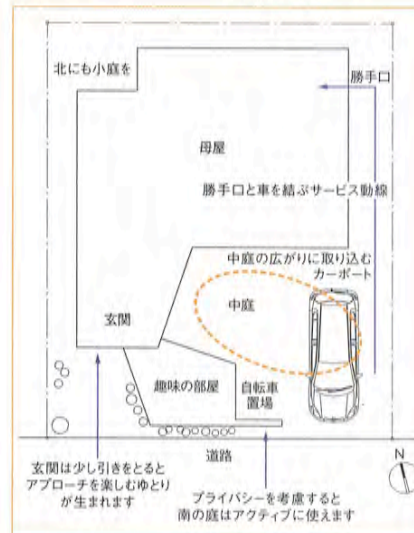


カーポートと一体で使える玄関の土間空間
玄関は一部屋として区画のルールが守られている
もてなしの間に直結して、廊下をつくらない工夫
玄関からも、もてなしの間からも使える押し入れクロゼット

玄関や庭の配置は道路との関係を考慮



下図は南道路における配置計画の好例です。玄関を道路から少し距離をとって落ち着きを与え、駐車ゾーンと生活庭とを上手に結びつつ、道行く人からの視線を柔らかに遮っています。



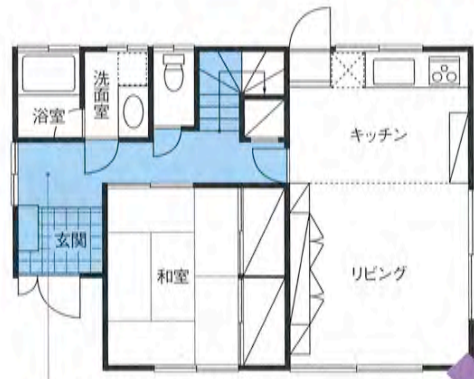
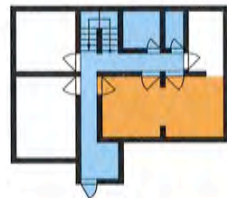
玄関は少し引きをとるとアプローチを楽しむゆとりが生まれます
プライバシーを考慮すると南の庭はアクティブに使えます



左図の配置計画の外観。南の庭を活用するには、道路からの落ち着きをいかにつくるかが大切です。この例では平家の趣味の部屋を道路側に据え、閉ざしすぎない程度に格子のスクリーンを設けて視線を遮っています。



右の模式図は、中廊下へ接続された玄関の例。外気がそのまま廊下や階段を冷やし、あるいは暑くしてしまうあり方です。下図はその実例間取り。誰にも会わずに2階に行ける、非交流住居といわざるをえません。



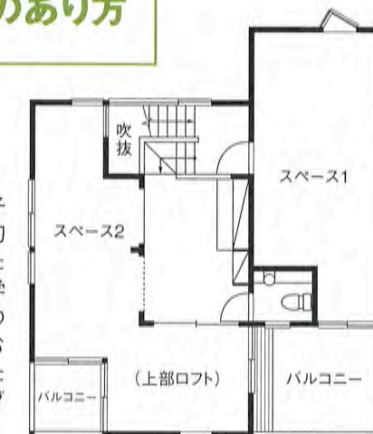
区画していない玄関は廊下や階段を冷やし、冷暖房された居室との温度差を生む。結露の原因にもなる



個室

団らんも大切に
独りの時間も大切に
空間づくりを

時間軸で可変する 子供の部屋のあり方



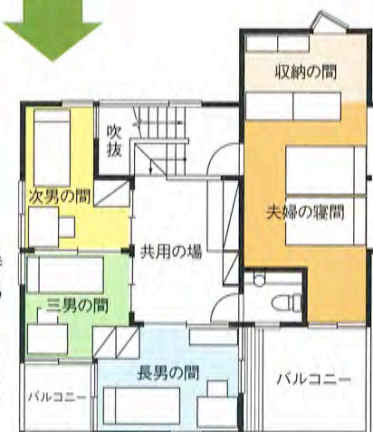
この計画は2歳違いの男の子3人の個室ゾーン。設計当初は幼児～小学校低学年でしたが、中学、高校、そして大学受験が重なる年齢構成なので、緩やかに個室化へと進むプランとしました。集まったあとは広々と第二のリビングとして使います。

これからしばらく
4.5年



暮らし始めたころはこんなふうで、末っ子は父母と休み、長男が次男の面倒を見ようとするスタイルでした。個室ゾーン全部が遊び場のような開放感です。

三人三様の
受験期に



長男に個室が必要となる時期が訪れると、次男が三男の面倒を見ながらも、軽く仕切ったスタイルになります。こうして子供たちとともに間取りも成長していきます。

個室が子供の成長にどんな影響を与えるのか、親としてはとても気になる場所です。主寝室や趣味室も取り上げたいスペースではありますが、ページの都合もあり、ここでは子供の部屋に焦点を絞って説明します。
個室（子供の部屋）を計画するうえで重要なキーワードは「成長・変化・交流」です。

POINT

- 1 子供の年齢に応じた個室のつくりが必要。幼児期での部屋づくりは、10年15年後の生活を想像して、レイアウト変更に対応えられるプランに
- 2 それらを受け入れるための構造計画をしっかり取り、スケルトン※として設定する
- 3 構造耐力上重要な壁を個室の間仕切り壁としない。撤去不能となってしまう
- 4 個室相互の関係を良好にするためには、共同で使える多目的スペースを小さくても計画しておく

※「スケルトン」とは、設備や間仕切り壁などの内装とは分離した、建物の構造体のこと

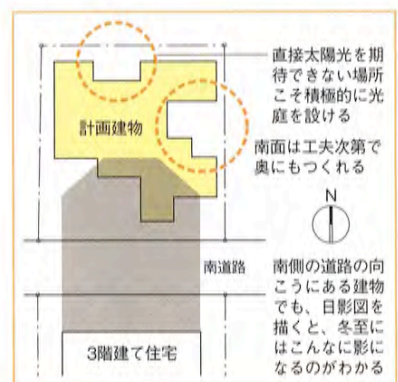
採光計画

生活に最も重要な「光」の環境づくりの原点

朝日の当たるダイニングで朝食をとる。冬の日だまりのある縁側での読書。光をきちんと制御した、木陰のような涼しさのリビングで語らう……。太陽の光は生活に豊かさをもたらします。しかし昨今のように夏が暑い状況に至ると、とにかく夏は涼しい家が欲しい。一方、秋の肌寒さを感じる季節から冬にかけては暖かな家がいいな……。日本の家は難しいですね。それに対応するには、いかに「四季」の太陽角度の変化に呼応した住まいにするかが重要です。

POINT

- 1 周囲の建物の影を調査し、影にかからない配置計画を基本とする
- 2 太陽光の入射角度に応じた屋根と窓の関係づくりをしつかりと
- 3 採光とともに遮光が肝心。夏の直射太陽光は取り入れないことを徹底的に追求してみよう
- 4 生活に豊かさを生む光のニュアンスをつかまえる。部屋ごとの明るさや暗さのイメージをもつこと



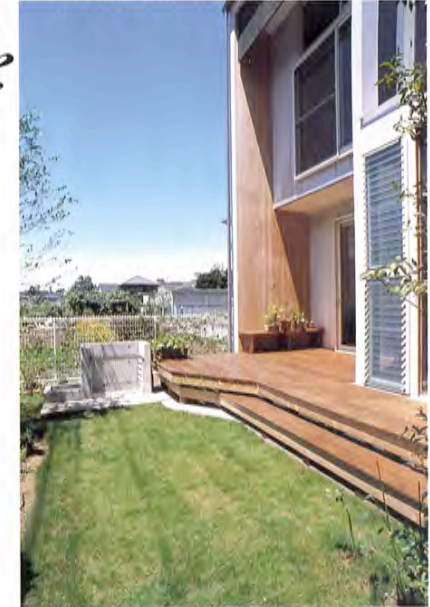
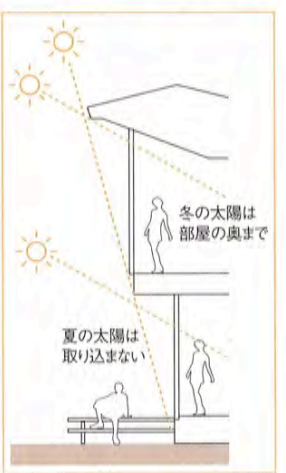
「光の間」を通してサンデッキを見たところ。ここは冬至には隣家の影に入ってしまうのですが、こうした場所には積極的にトップライトを設けると効果的。遮光のブラインドも計画しましょう。(撮影=冨田治)

敷地の余白が 採光に効く

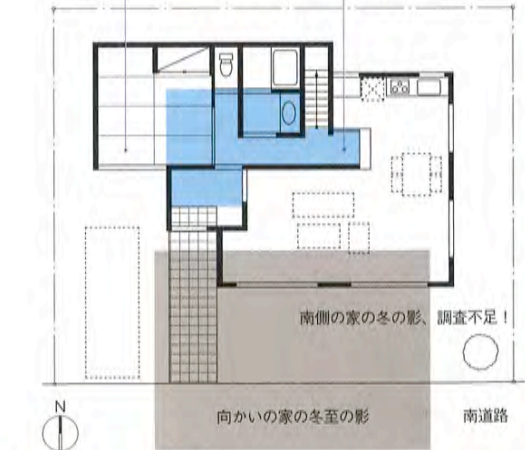
日の当たる窓を大きくすれば採光は満たされると考えがちですが、そもそも日が当たるかどうかを入念にチェックしましょう。配置計画の項にもあるように、周囲の建物の影は必ず確認。南面以外にも、余白（オープンスペース）を積極的にとれば、採光はさらに豊かに。

採光と遮光の共存を

写真の屋根がつくる影に注目。夏至の12時の影の様子。直接、太陽光線を室内に入れない「遮光」も「採光」のポイントです。(撮影=冨田治)



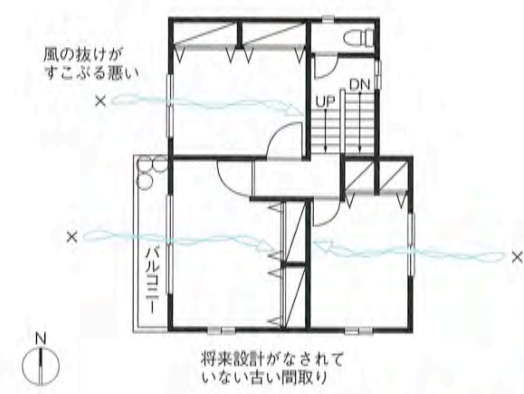
午後までまったく日の当たらない、完全分離した北部屋は使わなくなってしまいます。一年中、日の当たらない、風にも触れない中廊下は禁止！



向かいの建物の影を考慮しないと南面も意味がありません。中廊下は日が当たらない場所として、湿気やすく、カビやダニの温床になります。



写真は、子供が幼児期のこの住まいの様子。



将来設計がなされていない古い間取り。変化に追従できない、短命な個室間取り。高齢者からの新築住宅の設計依頼では、古い家の、こうした固定された間取りの使いにくさを嘆く建て主が少なくありません。

通風計画

風通しの良い家にはセオリーがあります

夏場、梅雨も明けて、外に湿気がなくなり始めると、窓を全開にして外の風を呼び込みます。断熱計画が成功した住まいならば、あたたかも木陰のような涼しさを得られます。24時間換気が法律で義務づけられた現在でも、自然の風通しによって換気を促すことは、建物のためにも人の身体のためにも健康的なことです。

以下に、風通しの良い家をつくるためのポイントを整理します。

POINT

- 1 「南から取り込んで、北に抜く」を基本にする。北側に設けるのは小さな窓でもOK
- 2 南北通風で風の背骨をつくれれば、その流れに引き寄せられるように東西の窓から風が呼び込まれる
- 3 北側にオーブンスペースをつくと、南北通風は促される
- 4 空気は暑くなると膨張し、軽くくなって上昇する。その原理を生かして、高いところから空気が抜けるように計画すると、外からの風がなくても、空気の流れが生じる。これをドラフト効果という

家族空間

家族空間は住まいの生命線
広がりやと落ち着きの共存を

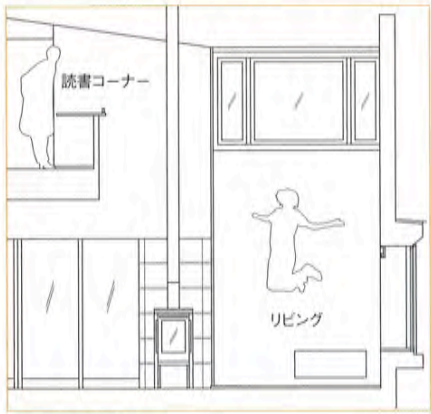
延べ床面積40坪程度の戸建て住宅ならば、リビングなどの家族空間は25畳以上の広がりやが欲しいところ。広がりや住まいの価値です。人間の心理にはちばん大きな影響を与えるのは、空間の量（広がり）であると指摘する識者もいます。その影響力は数字で定量化できませんが、家族が集まる場所として、広がりやに富んだ空間よりも狭い空間が快適であるとはまったくいえる方は少ないのではないのでしょうか。

POINT

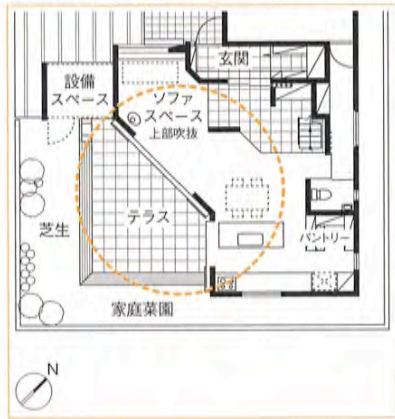
- 1 平面的な広がりがあるかどうか、まず直観的に感じてみよう
- 2 広がりの中にも「落ち着き」があるいは「溜まり場所」が必要
- 3 平面的な広がりだけでなく、立体的な広がりも検証したいところ。光を呼び込む吹き抜け、上下階の気配を結ぶ交流のための吹き抜けなど、アイデアはいろいろ
- 4 玄関を独立した部屋として直接接続し、廊下や階段は取り込んでしまおう。これが広がりのある家族空間をつくる最大のポイント

立体的に結ぼう

可能ならば、1階と分離されがちな2階のどこかと、リビングを吹き抜けて結んでみましょう。この例は読書コーナーから見下ろせるリビングです。



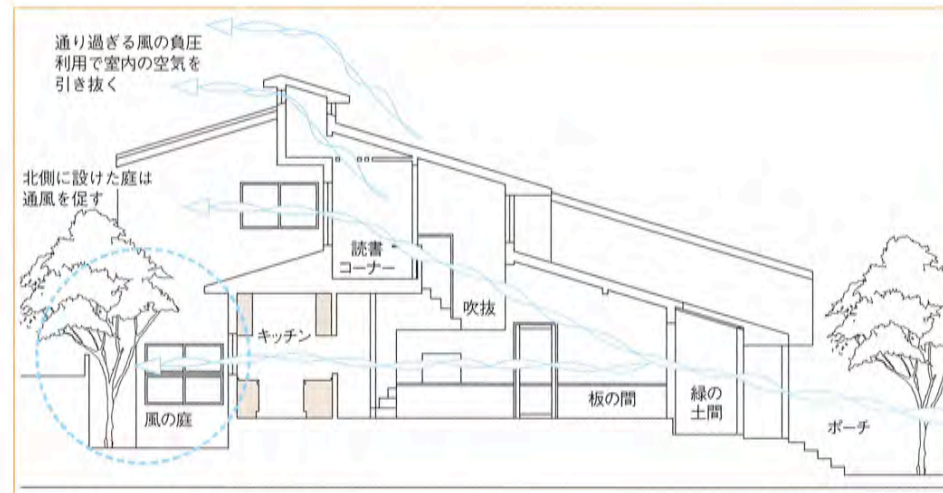
広がりをつくらう



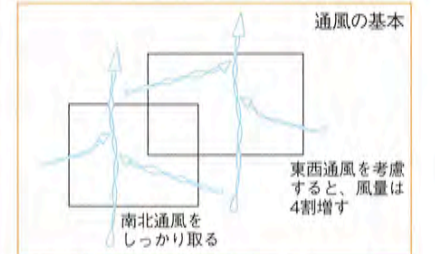
広がりや内部空間だけでなく、外空間へと広げましょう。上の写真の例では、アウトドアリビングとして外空間の活用が効果的になされています。全開放の引き戸との相性がとても良いです。

南北に風を抜こう

写真左は南を、右は同じ場所から北を見えています。南側に大きなテラス窓、北側にもキッチン奥に北庭を設け、南北の風の抜けを促しています。吹き抜けを介して、熱い空気を上部から抜く工夫もしています。



通風計画は平面だけでなく断面的に発想します。風の流れるような空間構成を心がけましょう。



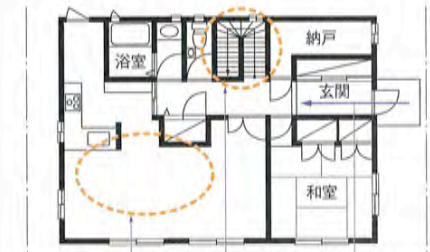
通風は南北通風を背骨として、東西の窓からは引き込むこと。「南から取り込んで、北に抜く」が基本。

広がりやと落ち着きを共存させよう

広がりやの中に落ち着きのコーナーをつくるには「動線」から外した「溜まり」を計画することです。左の写真は、上の実例の家族空間の一角に設けたソファスペース。薪ストーブを囲む、落ち着いてくつろげる場所となっています。

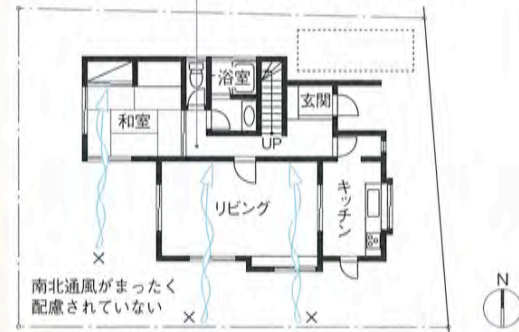


玄関から廊下、そして階段を上がり2階へと至るといふ、広がりやに乏しい間取りの定番スタイルです。風通し、日差し、交流性の悪さは、開放性の欠落と関係します。あまりいいところがない計画です。



広がりやに乏しく掘り込まない家族空間、孤立した動線、帰宅しても誰ともコミュニケーションがとれない

トイレのドアを開放しないと換気できない中廊下は最も好ましくない間取り。平面として成立していない



中廊下プランはいろいろな短所がありますが、風通しにすぶる悪影響をもたらします。この家の場合、リビングのドアを開けて、トイレのドアを開き、そして窓を開かないと風が抜けません。

壁の中にも風を通す

壁の中に風を通すことによって、建材から発生する有害な化学物質を外部に放出。さらに、土台や柱を「流れる空気」の中に置くことで、乾燥を促進します。人の健康と建物の長持ちのために、今後重要な観点です。

